

Prediction of liver stiffness for hepatocellular carcinoma in chronic hepatitis C patients on interferon-based anti-viral therapy

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2014-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 成田, 諭隆 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001632

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 乙第 2294 号

Prediction of liver stiffness for hepatocellular carcinoma in chronic hepatitis C patients on interferon-based anti-viral therapy

(インターフェロン治療を施行した C 型慢性肝炎患者の肝硬度測定による肝発癌予測)

成田 諭隆 (なりた ゆたか)

博士 (医学)

論文内容の要旨

【目的】現在、C 型肝炎患者に対しインターフェロン(IFN)を中心とする治療が広く行われている。IFN は HCV 排除による肝病態進行抑制だけでなく、ウイルス学的著効 (SVR) が得られなくても肝細胞癌(HCC)の発症リスクを軽減する効果が示唆されている。しかし一方で SVR 症例に HCC が発症する例が少なからず認められる。临床上、C 型肝炎患者の管理に発癌危険因子の評価は重要だが、IFN 治療後患者の発癌危険因子については確立されたものがない。近年、発癌と密接に関連する肝線維化の非侵襲的代替検査として FibroScan による肝硬度測定 (LSM) の有用性が多数報告されている。今回我々は IFN 治療後の C 型肝炎患者における発癌危険因子を LSM に注目して検討した。【方法】当院で肝生検と LSM 施行後に IFN 治療が行われた 207 例の C 型肝炎患者について後方視的に解析した。HCC 発症に寄与する要因について Cox 比例ハザードモデルを用いて解析した。累積肝発癌率は Kaplan-Meier 法で算出し、log-rank test で検定した。【結果】観察期間中央値 722 日で estimation cohort の 151 例では、3 年累積発癌率は 6.0% (9 例) だった。肝発癌に寄与する因子として単変量解析で年齢、LSM、血小板数、AFP 値、IFN 治療効果が抽出された。多変量解析では $LSM \geq 14.0 \text{ kPa}$ (HR5.58, 95%CI 1.32-23.64, $P=0.020$)、non-SVR (HR8.28, 95%CI 1.01-68.05, $P=0.049$)、血小板数 < 14.0 万 (HR5.59, 95%CI 1.14-27.53, $P=0.034$) が独立した危険因子として抽出された。対象患者をこれら危険因子の数で層別化し累積発癌率を検討したところ、3 因子あり、2 ないし 1 因子あり、危険因子なしの 3 群の 3 年累積発癌率はそれぞれ 59.6%、8.2%、0%であった ($P < 0.001$)。次に validation cohort について検討を行った。Estimation cohort の解析で得られた 3 因子について解析を行ったところ 3 因子あり、2 ないし 1 因子あり、危険因子なしの 3 群の 3 年累積発癌率はそれぞれ 28.6%、12.7%、0%であった ($P < 0.037$)。いずれの cohort でも危険因子なしの場合は 3 年累積発癌率が 0%であった。【結論】LSM と血小板数、IFN 治療効果を組み合わせることで、IFN 治療後 C 型慢性肝炎患者の HCC 発症リスクの層別化が可能だった。これにより IFN 治療を受ける C 型肝炎患者に対する FibroScan を用いた LSM 施行は有用であると考えられた。